

せんせい  
先生もいくんか

竹野栄・作 梶山俊夫・絵



NDC913/88P/23cm

1975年初版 B5変型判

8191-3702-7346

フレーベル幼年どうわ文庫 ②

## 先生もいくんか

昭和50年3月 第1刷発行

昭和50年5月 第2刷発行

著者 竹野 栄/作 梶山俊夫/絵

発行者 渡邊紫郎實

発行所 株式会社フレーベル館  
東京都千代田区神田小川町3の1  
郵便番号 101  
電話 東京(292)7781(代表)  
振替 東京19640

印刷所 凸版印刷株式会社  
乱丁・落丁本はおとりかえいたします。

## 竹野 栄 (たけの さかえ)

1922年、北海道奥尻島に生まれる。北海道第二師範学校卒業後、北海道、東京の小学校に勤務。現在練馬区立中村西小学校長。1961年より石森延男氏に師事、主著に「ブチよ、しっかりわたれ」(講談社第四回新人賞受賞)「わんぱくテッチャン」「でもねせんせい」がある。

## 梶山俊夫 (かじやま としお)

1935年、東京に生まれる。1960年、シェル美術賞受賞。絵本、挿絵に「ごろはちだいまいようじん」「おんちよろちよろ」「うまおいおどり」などがある。



# 九生もぐんか

竹野栄作 梶山俊夫 絵





きょうだいげんか

32

ミサ子のいえ

20

すなの学<sup>が</sup>校<sup>こう</sup>

6



もくじ



せんせい  
先生もいくんか

バカガイ

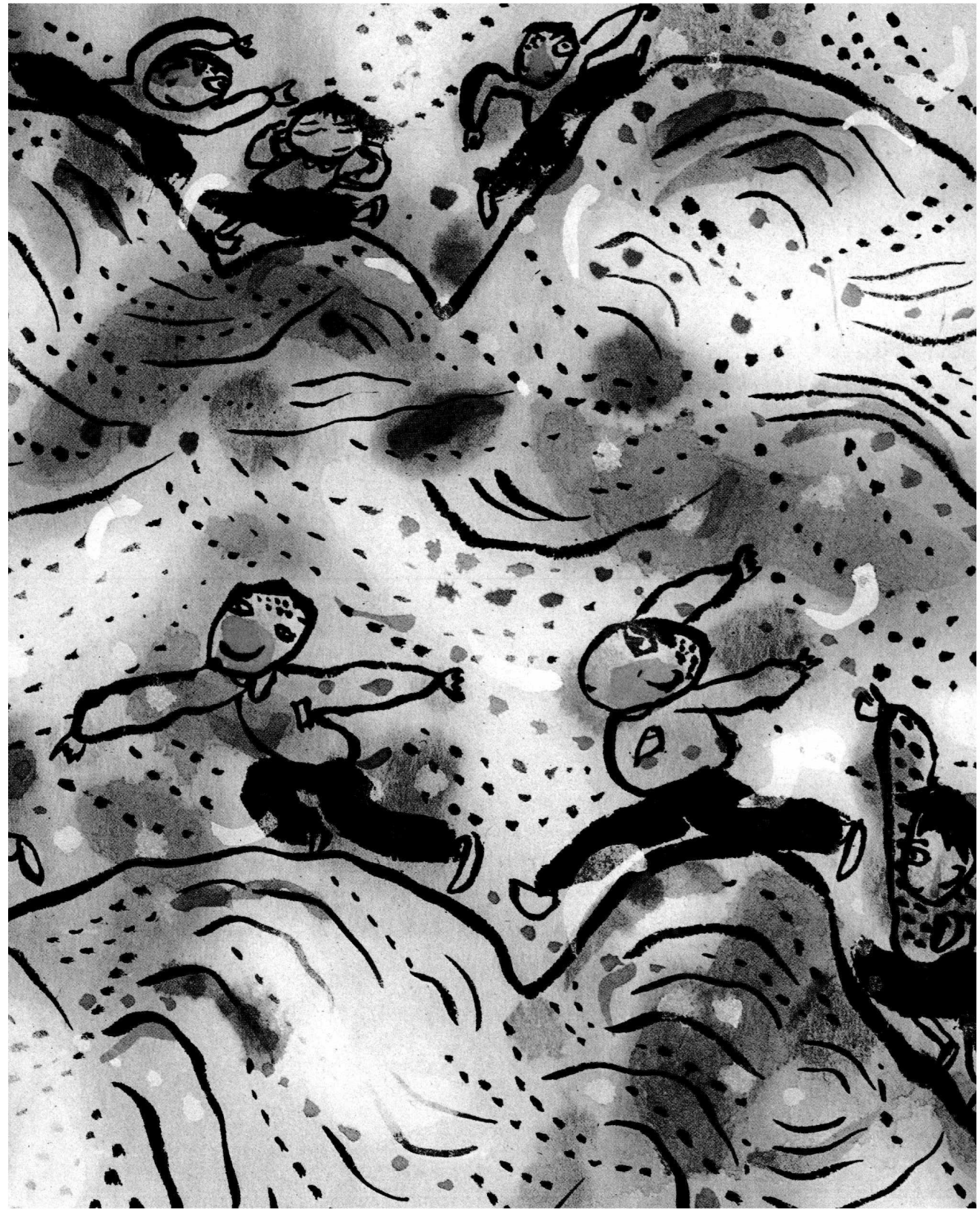
ひとりならび

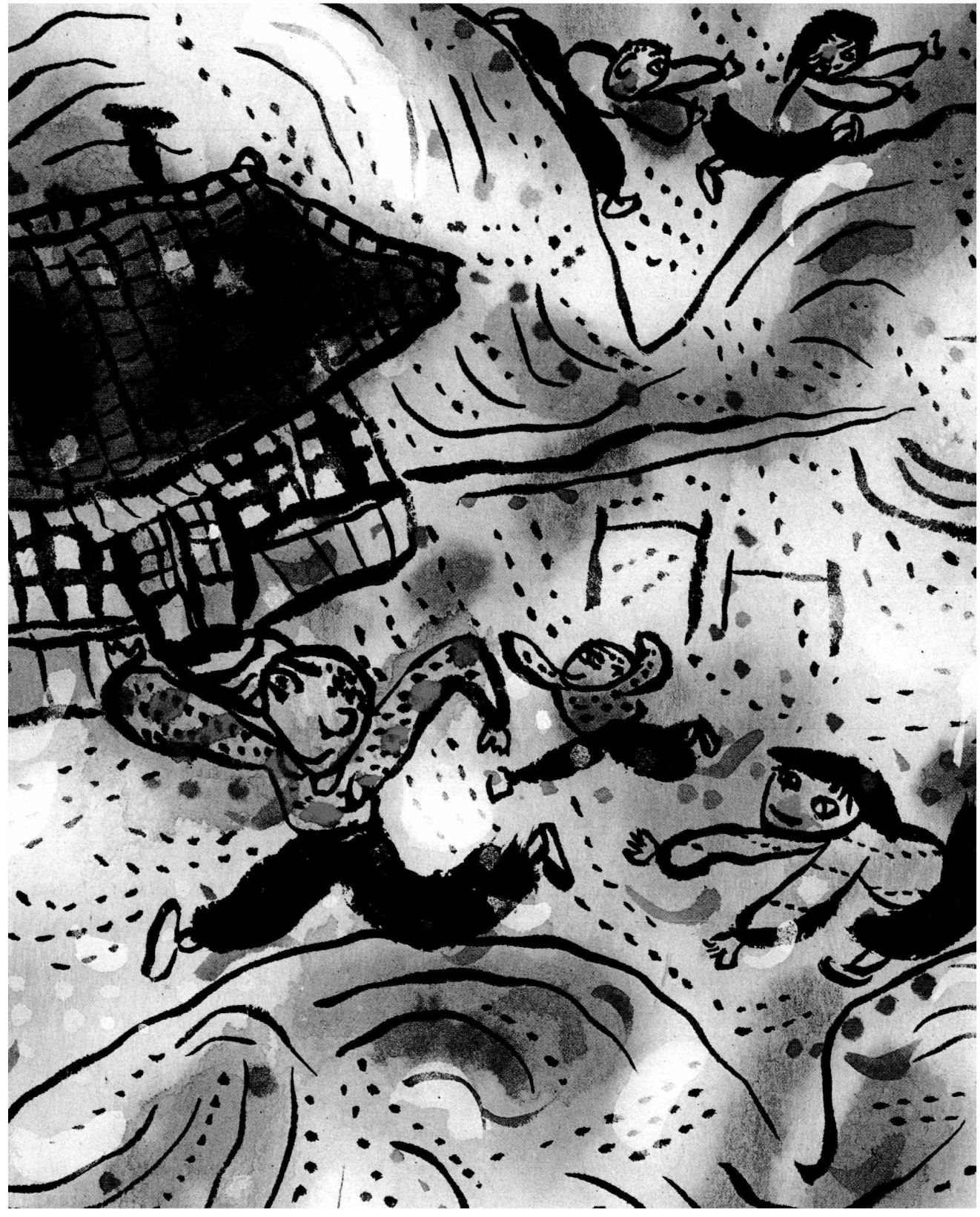


53

46

73





# すなの学校がっこう



「おはようございます。」

一年生いちねんせいの ともきちは、大きな おおきこえで、いって、学校がっこうへ はいりました。

あいさつは しましたが、まだ、だれも きていません。しんとして います。

あんちゃんの、三年生さんねんせいの こうへいが、ともだちの ところへ よったので、けさは ひとりで さきに きたのでした。

どうぐを つくえに いれながら、ともきちは、

(ミサ子、きょうはくるかなあ。)

と、おもいました。

ミサ子は、となりのせきの女の子です。

四月から、ずっとともきちとならんでいます。

それがどうしたのか、四、五日まえからやすんでいたのでした。

ともきちは、すなでざらざらしている、ミサ子のつくえの上を、

手のひらで、すつ、すつとはらいました。

そのあと、なんべんも、

「ふううっ　ふううっ。」

と、口でふいてから、ろうかへ出ました。

ともきちたちの学校は、ろうかも、いつもざらざらしていました。

五年生や、六年生が、いくらせつせとそうじをしても、すなが

どこからかはいりこみます。とくに、かぜのふく日はたいへんでし



た。

学校のまわりは、よこも、うしろも、すな山です。

すな山とすな山のあいだの、ひらたいところに、きょうしつが  
たった三つだけの、小さな学校が、たっているのです。

「この学校はな、すな学校だ。」

と、五年生も、六年生も、そして先生も、あきらめているのです。

○

ろうかへ 出たともきちは、きゆうに ろうかを かけたく なりま  
した。

じぶんの きょうしつの まえの ろうかは、いつも とおっています。  
けれども、その となりの、あんちゃんたちの きょうしつの まえは、  
ときどきしか とおりません。

その また となりの、五年生、六年生の きょうしつの まえは、一



どか、二<sup>に</sup>どしか、とおったことが  
ありません。

あまり いったことの ない、む  
こうの はしの ところまで、おも  
いっきり はしってみたいく なった  
のです。

(だれも いない。よし、やろう。)  
ともきちは、ダン、ダン、ダン、  
ダンツと、大<sup>お</sup>きな おとを たてな  
がら、いきおい よく、かけはじめ  
ました。

きょうしつ 三<sup>みつ</sup>つぶんの ろうか  
は、見<sup>み</sup>ると ながいようですが、か

けると わけが ありません。すぐに、むこうに ついてしまいます。

ともきちは、むこうに つくと、はめいたを、りよう手てで バタンと たたいて、すぐ ひきかえしました。

(これっぽっちじゃ、つまらないな。もう一いっかい やろう。)

二にかいめは、うんどうかいの ときのように、

「よいい、ドンッ。」

と、じぶんで あいずを して かけました。その きもちの よい こと。

(こんなに、うまく はしれるんなら、うんどうかいだって、一いっとうに なるな。)

と、ともきちは おもいました。

いっしょうけんめい はしる とき、ともきちは、あたまを すこし 右みぎに まげるのが、くせでした。

いまでも その かつこうで、かけて、かえって、また、かけて かえつて、三どめに、むこうへ ついて バタンと やった とき、ともきちは、いきが とまるほど びっくりしました。

すぐ 左がわの、ろうかの ひとところが、そとの ほうから、ぽっかりと あけられたのです。

そして、そこから 大きな 男の 人が、ぬうっと 出てきたのです。  
(あつあつ、あれえつ、こ、この 人、なんだらうつ。)

ともきちは、あつけにとられて、その 人の かおを、まじまじと 見つめました。

(赤い かおだ……ふとつちよ……カバに にている……あつ。)  
きが ついて、おもわず 口に 出しました。

「こうちよう先生だ！」

出てきたのは、こうちよう先生でした。



すぐに わからなかったのも、  
むりが ありません。

こうちよう先生<sup>せんせい</sup>は、いつもなら  
ようふくを きています。

ところが、いまは、だぶだぶの  
たんぜんを きています。

また、いつもなら、くろい ふ  
ちの メガネを かけています。

ところが、いまは、それを は  
ずして、小さな 目を、しよぼし  
よぼさせているのです。

いつまでも、ふしぎそうに し  
ている ともきちのかおを 見<sup>み</sup>

ると、こうちよう先生は、

「あつはつはつは。」

と、わらいだしました。

わらうと、かたが、上、下に よく うごきます。

「びつくり したんだな。だが、おばけじゃないよ。ここは、こうちよう先生の じゅうたくなんだ。ほら、この ドアから、出はいりできるんだ。わかつたかい。」

ところで、げんきが いいなあ、この 一年生は。……ははあ、三年生の、こうへいのおとうとだな。そうだろう。」

(あれえ、こうちよう先生は、おれの こと、おぼえてる。)

ともきちは、こわい きもちが すこし とれました。はじめて、ぺこりと おじぎを しました。

「げんきが いいのは よいかな、こんなに はやくから、ろうかを か

けられちゃ、うるさくて かなわん。人の めいわくに なるから、な、  
そとで あそびなさい、そとで。」

「はいっ。」

ともきちは、こんどは きちんとした こえで へんじを しました。  
すると、こうちよう先生は、

「ようし。……もつと こつちへ おいで。」

と、ともきちを よびよせて、

「いい 子<sup>こ</sup>だな。」

と、いいながら、大<sup>おお</sup>きな 手<sup>て</sup>で、ぐり、ぐりつと あたまを なでました。

ともきちは、たまらないほど うれしくなりました。

こうちよう先生<sup>せんせい</sup>の かおを 見<sup>み</sup>あげて、にっこりと わらいました。

ともきちが そとへ 出<sup>で</sup>るのを 見<sup>み</sup>おくってから、こうちよう先生<sup>せんせい</sup>は、

「ああ、あ。」